



第 27 回 獨協インターナショナル・フォーラム

見えるを問いなおす **ア**ート**イ**メージ**テ**クスト

The 27th Dokkyo International Forum 2015 Questioning "Sight" – Art, Image, and Text



12月11日(金) 12:20 ~ 18:30
12日(土) 10:30 ~ 18:30

会場：獨協大学 天野貞祐記念館大講堂
使用言語：日本語、英語、ドイツ語、フランス語(同時通訳)
入場無料

Date: December 11 (Fri.) and 12 (Sat.), 2015
Venue: Auditorium (The Amano Teiyu Hall), Dokkyo University
Languages used: Japanese, English, German, French
(simultaneous interpretation provided)
Free Admission

見えるを問いなおす **アート** **イ** **メ** **ー** **ジ** **テ** **ク** **ス** **ト**

概要

2015年度獨協インターナショナル・フォーラムは、「見える」を問いなおす——アート、イメージ、テキスト」と題して、(ポスト)近代における視覚の諸問題に焦点を当て、視覚と文化の関係を再考する視覚文化論を展開する。一般的に視覚文化論は、視覚の概念を伝統的な視覚的題材である絵画のような芸術的文脈に限定せず、視覚技術や媒体、写真等の近代映像技術、記号や表象などの視覚的な文化生成を読み解き、更には文化的に規定された「視覚の専制」といった問題に批判的に介入する営為である。視覚文化論という新たな領域が見出すのは、近代的世界観を規定した力への批判的視座である。絵画といった旧来の視覚芸術から、映画やインターネットのような現代の視覚媒体にいたる、見ることに関係する全ての文化的営為が、視覚文化論という研究領域の対象となる。要約するならば、見ること一般を対象としつつ、「見える」という経験自体を批判的に把握する研究である。

本インターナショナル・フォーラムでは、国内外からこの分野で優れた業績をあげる研究者を招聘し、視覚文化研究のさまざまな可能性について、西洋と東洋の文化圏を横断しつつ、とくに以下の2点について議論したい。

- ・視覚はいかに文化的・社会的に規定されるのか。
- ・近代社会における「視覚の専制」は、いかにして確立され、その後どのようなゆらぎをはらんできたのか。

この2つの問いと共に、「見える」という経験を可能とさせる文化的な諸力が交差する美術、写真、映画、文学などに内在する視覚の歴史とそのあり方を批判的に検討してみたい。

日程

12月11日 (金)

12:20-12:30	開会式 犬井正 (獨協大学学長)	12:30-13:40	特別講演 I 「日本仏画を記述する・比較する・展示する ——ルーヴル美術館極東美術コレクション 初代学芸員ガストン・ミジョン(1864-1930)の視線」 Laure Schwartz-Arenales (上智大学)
12:30-13:40	基調講演「唯物論的時間」 Keith Moxey (コロンビア大学)	13:40-13:45	休憩
13:40-13:45	休憩	13:45-15:15	研究発表 I 展示 高橋 雄一郎 (獨協大学) 松本 健太郎 (二松學舎大学) 山口 誠 (獨協大学)
13:45-15:15	研究発表 I 展示 高橋 雄一郎 (獨協大学) 松本 健太郎 (二松學舎大学) 山口 誠 (獨協大学)	13:40-13:45	休憩
15:15-15:30	休憩	13:45-14:45	研究発表 III イメージのポリティクス 片山 亜紀 (獨協大学) 若森 栄樹 (獨協大学)
15:30-16:30	研究発表 II イメージの歴史、歴史のイメージ 工藤 達也 (獨協大学) 阿部 明日香 (獨協大学)	14:45-14:50	休憩
16:30-16:50	休憩	14:50-16:00	特別講演 II 「デューラーの版画と素描における ヴィジュアルとマテリアル」 Anne-Marie Bonnet (ボン大学)
16:50-18:30	サイレント映画「日曜日の人々」 ピアノ伴奏上映 柳下 美恵 (サイレント映画ピアニスト) 司会：谷口 亜沙子 (獨協大学)	16:00-16:05	休憩
		16:05-17:05	研究発表 IV 風景 田中 正樹 (二松學舎大学) 小林 頼子 (目白大学)
		17:05-17:10	休憩
		17:10-18:20	パネル・ディスカッション Keith Moxey (コロンビア大学) Anne-Marie Bonnet (ボン大学) Laure Schwartz-Arenales (上智大学) 青山 愛香 (獨協大学) 福田 美雪 (獨協大学) 柿田 秀樹 (獨協大学) 司会：板場 良久 (獨協大学)

12月12日 (土)

10:30-12:00	映画の誕生を体験 ブラキシノスコープを使ったワークショップ 郷田 真理子 (IMAGICAウエスト)	18:20-18:30	閉会式 矢羽々 崇 (国際交流センター所長)
12:00-12:30	昼食		

The 27th Dokkyo International Forum 2015

Questioning “Sight” – Art, Image, and Text

Overview

The 2015 Dokkyo International Forum, “Questioning ‘Sight’ – Art, Image, and Text,” addresses questions on visual cultural studies by focusing on the problems of visibility in (post-) modernity and makes inquiries into the relationship between the visual and culture. Visual culture studies, conceptualizing the visual that is not solely limited to traditional visual materials such as art and paintings but also comprises visual technology and its medium including film (video) and photographs, construes cultural productions of the visual as signs and representations. It critically intervenes into the problem of “hegemony of vision,” in which the sight is culturally naturalized. Visual culture studies, a newly emerging field of inquiry, provide us a perspective to critique the cultural power of the modern worldview. From traditional art such as paintings to modern visual media such as film and the Internet, all cultural expression perceived through sight, involving our gaze, our view, falls within the scope of visual culture studies. In sum, visual culture is a field of inquiry with the aim to critically understand our experience of the sight; looking itself becomes a subject to critique.

The 2015 Dokkyo International Forum has invited leading scholars and researchers in the field of visual cultural studies from both Japan and abroad. Discussions will take place on a variety of topics, crossing cultural spheres of the East and West. The following two discussion topics in particular will be of special focus:

1) How vision is culturally and socially stipulated.

2) How “hegemony of vision” or “scopic regime” was established in modern society, and what kind of uncertainty has emerged.

Along with these two inquiries, the forum will critically examine our modern experience of sight, as the problems of visibility, enabled by multiple power relations in a given culture, traverse art, photography, film, and literature.

Time Table

December 11 (Friday)

12:20–12:30	Welcome and Opening Remarks Tadashi Inui, President, Dokkyo University	12:30–13:40	Special Lecture I: “Describe, Compare, and Present Japanese Buddhist Painting: The Vision of Gaston Migeon (1864-1930), First Curator of Far Eastern Art at Louvre Museum” Laure Schwartz-Arenales (Sophia University)
12:30–13:40	Keynote Address: “Material Time” Keith Moxey (Columbia University)	13:40–13:45	Break
13:40–13:45	Break	13:45–15:15	Presentation of Papers I: Display Yuichiro Takahashi (Dokkyo University) Kentaro Matsumoto (Nishogakusha University) Makoto Yamaguchi (Dokkyo University)
13:45–15:15	Presentation of Papers I: Display Yuichiro Takahashi (Dokkyo University) Kentaro Matsumoto (Nishogakusha University) Makoto Yamaguchi (Dokkyo University)	13:45–14:45	Presentation of Papers III: Politics of Image Aki Katayama (Dokkyo University) Yoshiki Wakamori (Dokkyo University)
15:15–15:30	Break	14:45–14:50	Break
15:30–16:30	Presentation of Papers II: History of Image, Image of History Tatsuya Kudo (Dokkyo University) Asuka Abe (Dokkyo University)	14:50–16:00	Special Lecture II: “‘Visibility and Materiality’ in Dürer’s Graphics” Anne-Marie Bonnet (University of Bonn)
16:30–16:50	Break	16:00–16:05	Break
16:50–18:30	Screen Projection of Silent Film “People on Sunday” with Piano Accompaniment Mie Yanashita (Silent Film Pianist) MC: Asako Taniguchi (Dokkyo University)	16:05–17:05	Presentation of Papers IV: Landscape Masaki Tanaka (Nishogakusha University) Yoriko Kobayashi (Mejiro University)
		17:05–17:10	Break
		17:10–18:20	Panel Discussion (Reflection on the Forum) Keith Moxey (Columbia University) Anne-Marie Bonnet (University of Bonn) Laure Schwartz-Arenales (Sophia University) Aika Aoyama (Dokkyo University) Miyuki Fukuda (Dokkyo University) Hideki Kakita (Dokkyo University) MC: Yoshihisa Itaba (Dokkyo University)
		18:20~18:30	Closing Remarks Takashi Yahaba, Director, International Center, Dokkyo University

December 12 (Saturday)

10:30–12:00	Praxinoscope Workshop Mariko Goda (IMAGICA West)
12:00–12:30	Lunch

映画「日曜日の人々」上映

12月11日 16:50～

ベルリンの休日をスケッチしたサイレント映画の傑作。
ナチスの悪夢がおきる直前の光に満ちた穏やかな風景を、
ピアノの生伴奏とともにお届けします。

作品紹介

1930年/ドイツ モノクロ&サイレント映画

監督：ロバート・シオドマク、エドガー・G・ウルマー

脚本：ビリー・ワイルダー



舞台は世界恐慌が起きる寸前のベルリン。タクシー運転手とモデルの妻。レコード屋の店員、ワインの行商人、そして映画のエキストラ。5人の主人公たちの、ある日曜日の姿をドキュメンタリー・タッチで描いたドラマ。活気に満ちたベルリンの街とそこに生きる人々の息づかいが生々しく伝わってくる。

(「株」プロードウェイ」発売のDVDより)

映画の誕生を体験 プラキシノスコープを使った ワークショップ

12月12日 (土) 10:30～

プラキシノスコープ (praxinoscope) は、1877年にフランスのエミール・レイノーが発明しました。

円筒の内側に少しずつ変化する絵を並べて描き、その円筒の中に入れて回転軸を鏡で囲って、その鏡に反射して映る絵を投影して見る機器です。円筒を回転させると鏡に映る絵が次々に入れ替わり、あたかも動いているかのように見え、アニメーションの原型とも言えます。

今回は、この円筒の内側に入れる絵を来場者に描いてもらい、実際にプラキシノスコープを使ってどのように見えるのかを試してみます。小さなお子様にも楽しんでいただける参加型イベントですので、ぜひご家族連れでお越しください。



獨協インターナショナル・フォーラム これまでのテーマ

第1回 (1987年)	対外摩擦と日本の政策決定	第14回 (2001年)	バルザックとその時代
第2回 (1988年)	現代国際社会における基本的人権	第15回 (2002年)	パフォーマンス研究：抵抗、変容と文化の混交
第3回 (1989年)	日本企業の国際化と世界経済	第16回 (2003年)	コミュニケーション重視の英語教育の反省とその将来の展望
第4回 (1990年)	今日のコミュニケーションの諸問題	第17回 (2004年)	東アジアにおける企業活動と法秩序
第5回 (1991年)	機能主義言語学の未来	第18回 (2005年)	ドイツと日本の環境を考える—持続可能な社会を目指して
第6回 (1992年)	学校に未来はあるか：文化認知科学による検討	第19回 (2006年)	子どもの救済のリアリティとグローバルスタンダード
第7回 (1993年)	言語音の認識と音韻論	第20回 (2007年)	日本とドイツにおける移民・難民・外国人労働者とその受入れ
第8回 (1995年)	アジア・太平洋地域における国際協力と日本の役割	第21回 (2009年)	ツーリズムの先へ：Beyond Tourism
第9回 (1996年)	国際安全保障と難民・PKO・ODA	第22回 (2010年)	アルバール・カミュ：現在への感受性
第10回 (1997年)	21世紀に向けて中華世界を学びなおす	第23回 (2011年)	日独交流の歴史から未来を見据えて—社会・文化・学問—
第11回 (1998年)	翻訳—文化—国際理解	第24回 (2012年)	3.11後の日本と国際社会
第12回 (1999年)	国際化時代の法学教育のあり方と課題	第25回 (2013年)	現代韓国社会の諸相
第13回 (2000年)	知と場所	第26回 (2014年)	持続可能な国際経済システムと日本

獨協大学50年の歴史

獨協のルーツは獨逸学協会学校

日本が本格的に国際化へと歩み始めた1883年、明治を代表する啓蒙思想家で日本の「哲学の父」とも言われた西周(にし あまね)を初代校長に、獨協学園の母体となった獨逸(ドイツ)学協会学校が創設されました。その系譜を受け継いで、獨協大学は1964年、哲学者、教育者である天野貞祐(あまの ていゆう)により創設されました。

2013年に獨逸学協会学校の創立130年、そして2014年、獨協大学は創立50周年を迎えました。

本学は学問を媒介とした人間形成教育と、獨協学園の伝統である実践的な語学教育を通じて、国際社会に活躍しうる優れた人材を育成することを目的としています。天野貞祐の言葉「大学は学問を通じての人間形成の場である」を建学理念に掲げ、本学の教育精神をこれからの50年に向けてさらに発展させていきます。



見えるを問いなおす **ア**ート**イ**メージ**テ**クスト

The 27th Dokkyo International Forum 2015 Questioning "Sight" - Art, Image, and Text

日時 2015年12月11日(金) 12:20~18:30
12月12日(土) 10:30~18:30

会場 獨協大学天野貞祐記念館大講堂

使用言語 日本語、英語、ドイツ語、フランス語(同時通訳)

入場 無料

主催 獨協大学国際交流センター、獨協大学外国語学部

後援 草加市

協賛  SIMUL 株式会社サイマル・インターナショナル
 コカ・コーライーストジャパン株式会社
 FVイーストジャパン株式会社

Date: December 11 (Fri.) and 12 (Sat.), 2015

Venue: Auditorium (The Amano Teiyu Hall), Dokkyo University

Languages used: Japanese, English, German, French
(simultaneous interpretation provided)

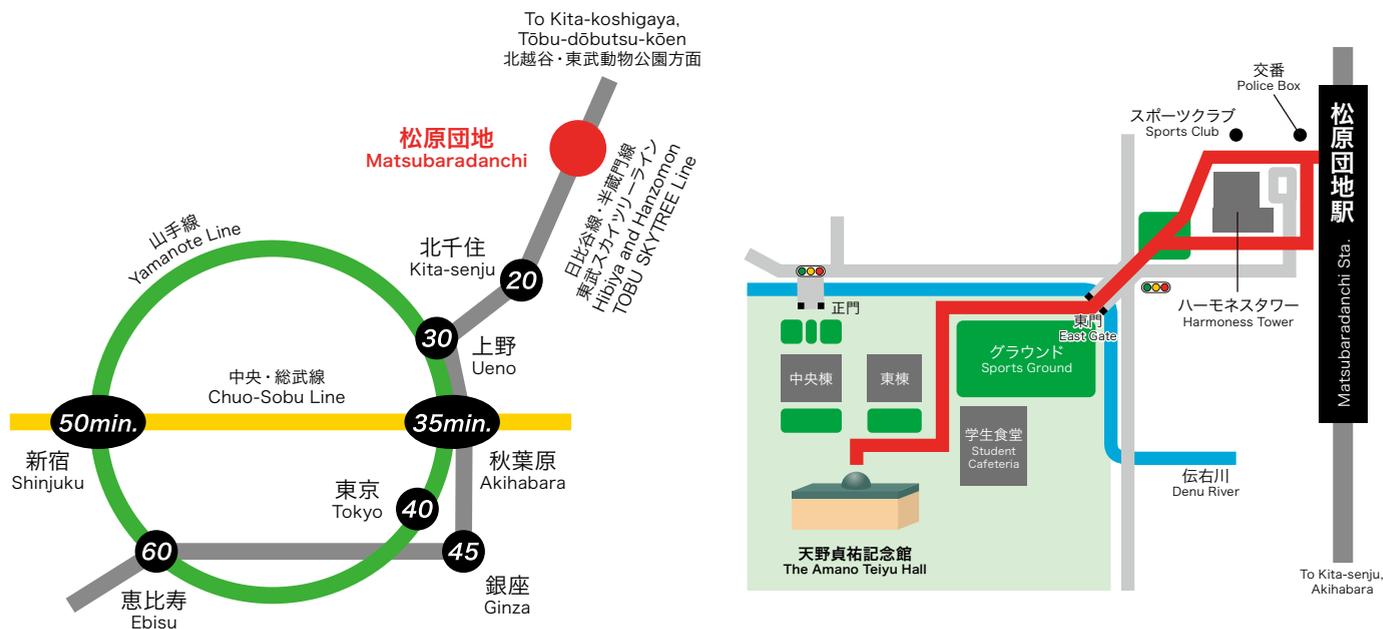
Admission: Free

Host Organization: International Center, Dokkyo University
Faculty of Foreign Languages, Dokkyo University

Sponsored by Soka City

Supported by Simul International Inc.
Coca-Cola East Japan Co., Ltd.
FV East Japan Co., Ltd.

獨協大学までのアクセス Access to Dokkyo University

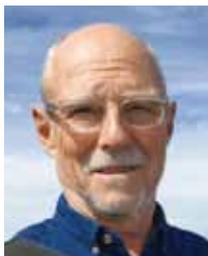


松原団地駅には各駅停車しか止まりませんのでご注意ください。

獨協大学は松原団地駅下車、西口より徒歩5分です。

Please note only local trains stop at Matsubaradanchi Station.

Dokkyo University is located 5 minutes on foot from Matsubaradanchi Station (West Exit).



キース・モクシー

コロンビア大学バーナードカレッジ教授。バーバラ・ノヴァク冠教授。視覚研究に関心領域とした美術史を専門とする。主要なイメージ研究の理論と実践に関する議論に寄与している。主要な著作は『視覚的時間—歴史におけるイメージ』(2013)、『説得の実践—美術史における政治とパラドックス』(2001)、『理論の実践—ポスト構造主義、文化の政治、美術史』(1994)、『農民、戦士、そして女房たち—宗教改革におけるポピュラーイメージ』(1994)。また、『美術史、美学、視覚文化』(2002)、『美術史の主題—現代的視点から見た歴史の対象』(1998)、『視覚文化—イメージと解釈』(1994)、『視覚理論—絵画と解釈』(1991)などを共編。『美術史』(イギリス)、『美術史誌』(スウェーデン)等の定期刊行物の編集委員も務める。

Keith Moxey

Keith Moxey is Barbara Novak Professor of Art History at Barnard College/Columbia University. An art historian who is also interested in visual studies, he contributes to debates relating to the theory and practice of the study of the image in all its forms. His publications include *Visual Time: The Image in History* (2013); *The Practice of Persuasion: Politics and Paradox in Art History* (2001); *The Practice of Theory: Poststructuralism, Cultural Politics and Art History* (1994); and *Peasants, Warriors and Wives: Popular Imagery in the Reformation* (1994). He is also the co-editor of several anthologies: *Art History, Aesthetics, Visual Culture* (2002); *The Subjects of Art History: Historical Objects in Contemporary Perspective* (1998); *Visual Culture: Images and Interpretations* (1994); *Visual Theory: Painting and Interpretation* (1991). He is on the boards of *Art History* (United Kingdom), *Konsthistorisk Tidskrift* (Sweden) and other periodicals.

研究発表 I 展示



高橋 雄一郎 (タカハシ ユウイチロウ)

獨協大学外国語学部交流文化学科教授。修士(英米文学・上智大学、パフォーマンス研究・ニューヨーク大学)。著書に『パフォーマンス研究—身体化する知』(せりか書房、2005年)など。最近は、歴史展示のパフォーマンス性に関心を寄せている。

Yuichiro Takahashi

Professor, Department of Tourism and Transnational Studies, Faculty of Foreign Languages, Dokkyo University. MA in English Literature (Sophia University) and in Performance Studies (New York University). Publications include *Performance Kenkyu* ("Performance Studies," Serika-Shobo, 2005, in Japanese). Performative nature of historical display is among his recent research interests.



松本 健太郎 (マツモト ケンタロウ)

二松學舎大学文学部准教授。立教大学異文化コミュニケーション学部兼任講師。国際基督教大学教養学部、獨協大学外国語学部、サイバー大学IT総合学部で非常勤講師を務める。国際基督教大学卒業後、京都大学大学院で博士号(人間・環境学)取得。専門領域は記号論・メディア論・映像論など。日本記号学会理事・副事務局長。主著に『ロラン・バルトにとって写真とは何か』(ナカニシヤ出版、2014年)、『空間とメディア—場所の記憶・移動・リアリティ』(ナカニシヤ出版、2015年)など。

Kentaro Matsumoto

Kentaro Matsumoto is Associate Professor of Media Studies at Nishogakusha University. He holds a Ph.D. in Human and Environmental Studies from Kyoto University, and he specializes in semiotics and media studies. He served as director for the Japanese Association for Semiotic Studies. His recent publications include *On Roland Barthes: What is a Photograph?* (Nakanishiya-Shuppan, 2014) and contributions to the anthology, *Space & Media* (Nakanishiya-Shuppan, 2015).



山口 誠 (ヤマグチ マコト)

獨協大学外国語学部交流文化学科教授。東京大学大学院人文社会科学系研究科博士課程修了。博士(社会情報学)。関西大学社会学部を経て現職。専門はメディア研究、歴史社会学、観光研究。主著に『英語講座の誕生』(講談社、2001年)、『グアムと日本人』(岩波書店、2007年)、『ニッポンの海外旅行』(筑摩書房、2010年)など。

Makoto Yamaguchi

Makoto Yamaguchi, Ph.D., is Professor in the Department of Tourism and Transnational Studies, Faculty of Foreign Languages, Dokkyo University. He currently researches history and the relationship between media and tourism. Recent publications include: *Birth of English Broadcasting Program* (Kodansha, 2001), *Guam and Japanese* (Iwanami-shoten, 2007), and *Oversea Tourism of Japan* (Chikumashobo, 2010).

研究発表 II イメージの歴史、歴史のイメージ



工藤 達也 (クドウ タツヤ)

獨協大学外国語学部ドイツ語学科教授。東京大学大学院人文科学研究所課程博士(文学)。東京大学助手等を経て現職。日本独文学会所属。専門はドイツ近現代文学・批評理論(主にヴァルター・ベンヤミン)。主な論文に『媒質と記憶』(『記憶と記録』、東京大学出版会、2001年)、『哲学の焦点としての物について』(『ドイツ学研究』第65号、2012年)、『アイヒェンドルフ、流浪と哀悼の(現在)』(『ドイツ学研究』第68号、2014年)など。

Tatsuya Kudo

Professor of German Literature and Critical Theory at Dokkyo University. He holds a Ph.D. in German literature from the University of Tokyo. His research interests are German modern literature and German philosophy. His major focus is Walter Benjamin—in association with recent media theory and cultural studies in Germany. His recent monographs are "Media and Memory in Walter Benjamin's Literature Critics" (*University of Tokyo Press*, 2001), "Philosophical Focus on the Thing by the Ontology and Metaphorology" (*German Studies Dokkyo*, No. 65, 2012), and "Eichendorff's Lyrical Presence of Wandering and Grief" (*German Studies Dokkyo*, No. 68, 2014).



阿部 明日香 (アベ アスカ)

獨協大学外国語学部フランス語学科専任講師。主な論文に *Inshô-ha: diffusion et réception de l' école française dite «impressionniste» au Japon entre 1945-1985* (博士論文、パリ第1大学、2013年)、『戦後日本における「美術」: 美術教育と西洋近代絵画の受容をめぐる』(『フランス文化研究』第46号、2015年)。

Asuka Abe

Lecturer in French and Art History in the Department of French, Faculty of Foreign Languages, Dokkyo University. She holds a Ph.D. in History from Université de Paris I. Her recent studies include *Inshô-ha: diffusion et réception de l' école française dite «impressionniste» au Japon entre 1945-1985* (Thesis, Université de Paris I, 2013) and "The Concept of 'Art' in Japan after the World War II: The Art Education and the Reception of Modern Western Painting" (*Bulletin of the French Department, Dokkyo University*, No. 46, 2015).

サイレント映画「日曜日の人々」ピアノ伴奏上映



柳下 美恵 (ヤナシタ ミエ)

サイレント映画ピアニスト。武蔵野音楽大学ピアノ専攻卒業。1995年に朝日新聞社主催の映画生誕100年記念「光の誕生リユミエール！」でデビュー以来、国内外で活躍。欧米式のサイレント映画伴奏者は日本人初。洋画、邦画を問わず全ジャンルの伴奏のほか、尾崎、川崎、豊岡、タイなど映画館での音楽ワークショップも行う。2006年度日本映画ペンクラブ奨励賞受賞。DVD「裁かるゝジャンヌ」[魔女] (紀伊国屋書店)、「日曜日の人々」[アイアンホース]「血涙の志士」[見世物] (ブロードウェイ)、Blu-ray「裁かるゝジャンヌ」(英Eureka Entertainment)で音楽を担当。

Mie Yanashita

Silent film piano accompanist Mie Yanashita graduated from Musashino Academia Musicae with a major in piano. She has been working internationally since her 1995 debut at the Asahi Shimbun-hosted 100th anniversary celebration of the birth of cinema, “Lumière! Birth of Light.” She is the first European style piano accompanist in Japan. She plays piano accompaniment for both Western and Japanese films of all genres. She has recently lead music workshops at movie theaters in Onomichi, Kawasaki, and Toyooka, as well as in Thailand and other locations. She is the 2006 recipient of the Japan Movie Pen Club Encouragement Award. Her compositions and piano accompaniment are featured on such DVD recordings as *The Passion of Joan of Arc*, *Haxan* (Kinokuniya Shoten); *People on Sunday*, *The Iron Horse*, *Hangman’s House*, *The Show* (Broadway); as well as on the Blu-ray edition of *The Passion of Joan of Arc* (Eureka Entertainment).

ワークショップ



郷田 真理子 (ゴウダ マリコ)

フィルム技術者。株式会社IMAGICAウェスト フィルムプロダクション部勤務。NPO法人・映画保存協会の活動、小型映画関係の仕事を経たのち、5年間東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館でフィルム調査に従事、2014年より現職。その他の活動にプラキシノスコープなど映像玩具を使ったワークショップ講師、「ホームムービーの日」上映会(相模原、大阪・新世界会場)の世話人など。論文に「フィルムセンター所蔵の小型映画コレクション 9.5mmフィルム調査の覚書」(『東京国立近代美術館 研究紀要』第17号)。

Mariko Goda

Mariko Goda is film engineer in the film production department at Imagica West Corporation. Following her work for the non-profit Film Preservation Society, as well as work on small-scale film productions, she served as a film researcher at the Sagami-hara Branch of the National Museum of Modern Art, Tokyo, for five years. She has given lectures and facilitated workshops on visual artifacts, such as the praxinoscope, and has coordinated Home Movie Day at the Sagami-hara City Audio Visual Education Library. Her recent publications include “Film Center Collection of Small Gauge Films: Memorandum Concerning a Study of 9.5mm Films” (*Bulletin of the National Museum of Modern Art, Tokyo*, No. 17, 2013).

12月12日(土)

特別講演 I



ロール・シュワルツ＝アレナレス

上智大学文学部フランス文学科准教授。専門は日本美術史とミュージオロジーで、比較、横断的、国際的視点から研究している。ルーヴル美術学校修了、ソルボンヌ(パリ第4)大学にて平安仏画についての論文で博士号取得(『応徳涅槃図』試論—星辰信仰をめぐる二重のイメージ、2003年)。ルーヴル美術学校、国立ギメ東洋美術館、東北大学東洋・日本美術史研究室、京都国立博物館、お茶の水大学比較日本教育センターを経て現職。2007年鹿島美術財団賞受賞。主な論文に「日本仏画の記述と比較—ガストン・ミジョンが見た東寺旧蔵十二天像」(『論集・東洋日本美術史と現場—見つめる・守る・伝える』竹林舎、2012年)ほか。

Laure Schwartz-Arenales

Laure Schwartz-Arenales is Associate Professor at Sophia University (Department of French Literature, Cultural Interaction Studies) with research specialization in Japanese Art and Museology. She holds a Ph.D. in Art History from Université de Paris IV where her dissertation research focused on Heian period Buddhist painting. Her research interests are Japanese Art History and the reception of Japanese art in France, developing her research from a comparative, transversal and international point of view. In her professional career she has worked at the Ecole du Louvre, Guimet Museum, Tohoku University, Kyoto National Museum, and Ochanomizu University. Her recent publications include “L’Orient de Gaston Migeon (1861-1930): Retour sur l’introduction des collections d’art japonais au Musée du Louvre” (*Revue d’études françaises*, No. 49, Sophia University, 2015) and “Le Bois sacré du Nirvāna -Essai d’interprétation d’un chef-d’œuvre de la peinture bouddhique japonaise” in *La Question de l’art en Asie Orientale* (Presses de l’Université de la Sorbonne, 2008).

研究発表Ⅲ イメージのポリティクス



片山 亜紀 (カタヤマ アキ)

獨協大学外国語学部英語学科准教授。イースト・アングリア大学大学院修了、博士(英文学)。専門はイギリス小説、ジェンダー研究。論文に「アイリス・マードックにおける妊娠中絶問題」(小玉亮子編『現代と性をめぐる9つの試論』春風社、2007年)、研究ノートに「トランスジェンダーの物語を学生と読む」(『獨協大学英語研究』第75号、2014年)、訳書にキャンダス・デュ・ピュイとデイナ・ドヴィチ『癒しのカウンセリング—中絶からの心の回復』(平凡社、2003年)、ヴァージニア・ウルフ『自分ひとりの部屋』(平凡社、2015年)など。

Aki Katayama

Aki Katayama is Associate Professor in the Department of English, Faculty of Foreign Languages, Dokkyo University. She holds a Ph.D. in English Literature from the University of East Anglia. Her research interests are Virginia Woolf, English novels, and gender issues. Her publications include “Abortion Issues for Iris Murdoch” in Ryoko Kodama (ed.), *Nine Essays on Gender in Our Age* (Shumpusha, 2007), and “On Student Responses to a Transgender Story” in *Dokkyo University Studies in English*, No. 75 (2014). She has just translated Virginia Woolf’s *A Room of One’s Own* into Japanese (Heibonsha, 2015).



若森 栄樹 (ワカモリ ヨシキ)

獨協大学外国語学部フランス語学科教授。東京大学大学院人文科学研究所フランス語学専修課程フランス文学修士課程修了。日本フランス語フランス文学会、日仏哲学会会員。日本ラカン協会理事長(2001年より現在に至る)。専門は現代フランス文学・思想。著書に『精神分析の空間—ラカンの分析理論』(弘文堂、1988年)、『日本の歌—憲法と署名の権力構造』(河出書房新社、1995年)、『他者のトポロジー』(共著、書肆心水、2014年)など。

Yoshiki Wakamori

Yoshiki Wakamori is Professor of French Literature and Philosophy at Dokkyo University. Member of the Society of French Language and Literature and the Japan Society of French Philosophy, he has served as president of the Lacanian Society of Japan since 2001. His publications include *The Space in Lacanian Psychoanalysis* (1988), *The Song of Japan—Political Power in Japan and Problems of Signature* (1995), and a contribution to the anthology, *Topology of the Other* (2014). In 2002, he presented the paper “Origine et conséquences du système impérial Japonais contemporain: les reactions de Yukio Mishima et Shichirō Fukazawa” at Société française des études japonaises.

特別講演 II



アンヌ＝マリー・ボネ

ボン大学教授（美術史家／アートキュレーター／美術評論家）。ボン大学でルネサンスから近・現代美術史の講座を担当。アートキュレーター、美術評論家としても幅広く活動している。美術史の歴史および方法論、ミューゼオロジー、アート界の構造全体に関心がある。近年の主な研究業績は『デューラー、ヌードの発見』（ミュンヘン、2014年）、『ルネサンスの画家 クラナハ』（ミュンヘン、2015年）ほか多数。

Anne-Marie Bonnet

Anne-Marie Bonnet is Professor of History of Art at the University of Bonn. Her research focuses on art from the Renaissance to the present day. She has also worked widely as a curator and critic of art. Her research interests are the history and methodology of art history research, the history of museums, the history of collections, and constructions of the greater art world. Her recent publications include *Albrecht Dürer, The Invention of the Nude* (München, 2014) and *Lucas Cranach, Maler der Renaissance* (München, 2015).

研究発表 IV 風景



田中 正樹（タナカ マサキ）

二松学舎大学文学部中国文学科教授。東北大学大学院文学研究科博士後期課程（中国学専攻）単位取得退学。専門は中国思想（宋代士大夫思想研究）、中国美学（中国芸術思想研究）。論文に「秦觀『浩氣傳』について」（2015）、『蘇軾『論語説』について』（2013）、『中国の聴覚 II—風景に音声はあるか』（1998）など。

Masaki Tanaka

Masaki Tanaka is Professor in the Faculty of Literature at Nishogakusha University. His research focuses on the ideology of Chinese scholars in Song Dynasty and Chinese aesthetic theory. His publications include “A Study on Qin Guan’s ‘Hao-qi lun’” (2015), “A Study on Su Shi’s ‘Lun-yu shuo’” (2013), and “A Study of Auditory Perception in Chinese Literature II: Does Landscape Have Sounds?” (1998).



小林 頼子（コバヤシ ヨリコ）

目白大学社会学部メディア表現学科教授。慶應義塾大学文学研究科（修士）。目白大学准教授を経て現職。2000年、第10回吉田秀和賞受賞。2009年9月～2010年1月、オランダ王立人文社会科学高等研究所訪問研究員。専門は17世紀オランダ美術史、江戸期の日蘭美術交流史。主著に『改訂新版フェルメール論』（2006年、八坂書房）、『フェルメール全作品集』（小学館、2012年）、『庭園のコスモロジー』（青土社、2014）など。

Yoriko Kobayashi-Sato

Yoriko Kobayashi-Sato is Professor of Art History at Mejiro University, Tokyo. She was granted the Yoshida Hidekazu Award in 2000 and invited to the Netherlands Institute for Advanced Study in the Humanities and Social Sciences from Sep. 2009 to Jan. 2010. Her research concentrates on Dutch art of the 17th century and cultural exchanges between the East and West during the Edo period. Her main publications are *The Complete Works by Vermeer* (2012, in Japanese), “Perspective and Its Discontents or St. Lucy’s Eyes” (2012 with M.M. Mochizuki); “Japan’s Encounter with the West through the VOC” (2014); and *Cosmography of a Garden* (2014, in Japanese).

パネル・ディスカッション



青山 愛香（アオヤマ アイカ）

獨協大学外国語学部ドイツ語学科准教授。東京芸術大学美術研究科（博士）。2010年、第23回辻荘一・三浦アンナ賞受賞。専門は15、16世紀のドイツ美術史。主著に『デューラーの遍歴時代—初期素描の研究』（中央公論美術出版、2009年）、訳書にハインリッヒ・ヴェルフリン著『アルブレヒト・デューラーの芸術』（中央公論美術出版、2008年）など。

Aika Aoyama

Aika Aoyama is Associate Professor of Art History at Dokkyo University. She was granted the Tsuji Shochi-Anna Miura Award in 2010. Her research concentrates on German art of the 15th and 16th centuries and cultural changes between North and South as seen in the works of Albrecht Dürer. Her main publications are *Ein bisher unbekanntes Vorbild für Dürers “Thronender Greis und kniender Jüngling”* (2005) and *Dürers Werke aus der Wanderjahre* (2009, in Japanese).



福田 美雪（フクダ ミユキ）

獨協大学外国語学部フランス語学科専任講師。パリ第3大学文学博士修了。専門は19世紀フランス文学、特にゾラと自然主義。主著に『教養のフランス近現代史』（共著、ミネルヴァ書房、2015年）、『フランス文化読本』（共著、丸善、2014年）など。

Miyuki Fukuda

Miyuki Fukuda is Lecturer in French Literature at Dokkyo University. She holds a Ph.D. in Literary Studies from the University of Paris III. Her research interests are in 19th century French literature, especially in Zola and Naturalism. Her recent publications include contributions to the anthology, *French Modern History for the Liberal Arts* (Minerva Shobo, 2015) and *Readers of French Culture* (Maruzen, 2014).



柿田 秀樹（カキタ ヒデキ）

獨協大学外国語学部英語学科教授。アイオワ大学コミュニケーション学研究科博士（Ph.D.）。青山学院大学専任講師などを経て現職。2004～2006年日本コミュニケーション学会（CAJ）ジャーナル編集長、2006～2010年に同学会学術局長を務める。専門は批判レトリック理論、視覚レトリック理論。主著に『倫理のパフォーマンス』（彩流社、2012年）、『現代日本のコミュニケーション研究』（共著、三修社、2011年）など。

Hideki Kakita

Hideki Kakita is Professor of Rhetorical and Critical Theory at Dokkyo University. He holds a Ph.D. in communication studies from the University of Iowa. He served as chief editor of academic journals for the Communication Association of Japan from 2004 to 2006 and has also served as its director of academic affairs. His research interests range from rhetorical and critical theory to visual rhetoric and technology. His recent publications include *The Performative of Ethics* (Sairyusha, 2012) and contributions to the anthology, *Studies of Contemporary Communication in Japan* (Sanshusha, 2011).